

# 脳における エストロゲンの見えざる作用 —子の虐待の背景にあるもの—

東京大学名誉教授  
医療法人社団レニア会アルテミスウイメンズホスピタル理事長  
武谷 雄二

## はじめに

前号と重複するが、報酬システムとはヒトを含む動物が、その個体を維持し子孫を残すような行動を確実に実行するために、これらに必要な行為を快楽、快感として感ずる脳のしくみを指す。たとえば生きるために必要な食物は美味しいと感じる、異性に魅かれる、性欲などが報酬システムを刺激するものである。なお、高等動物では自身の存在を誇示し、より多くの子孫を残したいという本能が名誉心というかたちで報酬システムを活性化させる。報酬システムに関連する行動は、それが快楽と感ずることで、強固な動機付けがなされ、例外なく実行されることが担保されることになる。前号では母性は報酬システムと密接に関わっており、子と接することによりほかの快楽刺激を上回って報酬システムが持続的に刺激され、母性が維持されることを述べた。

本来育児は母親にとって喜びを覚え、気持ち安らぐものであるにもかかわらず、現実には育児放棄・児童虐待の報告例は増加の一途にある。人口が地球の収容能力の限界を超えるに至るほど人類は種としての繁栄を極めてきたが、その原動力ともいえる子への手厚い養育が部分的ではあるにせよほころびが生じている。それには家族構成の

変化、共働きの親の増加、教育を含む育児負担の著しい増加、過酷な競争社会を生き抜くための親の疲弊などさまざまな要因が考えられる。直接的には育児放棄・児童虐待は育児により得られる喜びが鈍化しているとも解釈できる。このような視点に立つと育児放棄・児童虐待は何らかの原因で、子への接触が報酬システムを効果的に活性化しない結果であると考えられる<sup>1)</sup>。本稿では育児の喜びを阻害するさまざまな要因を概観し、その対策を講ずるうえでの参考となればと念じている。

## アルコール・薬物依存症と 育児放棄・児童虐待

本来報酬システムを刺激する対象は個体や種を維持させるための合目的性がある。しかしながらわれわれの健康や種の維持にとって有害な事物も報酬系を刺激する。たとえばアルコール、薬物、喫煙、ギャンブル、ゲーム依存、衝動買いなども報酬系を刺激する。しかしこれらは生理的な報酬システム刺激因子ではなく、飽くなき快感に溺れてしまい、離脱するのが困難となる。さらにこれらは報酬システムをハイジャックしてしまうことで、本来報酬システムと強固に結びついた生理的かつ合目的的な行動が妨げられ、自己破壊的な生き方を辿るようになる。